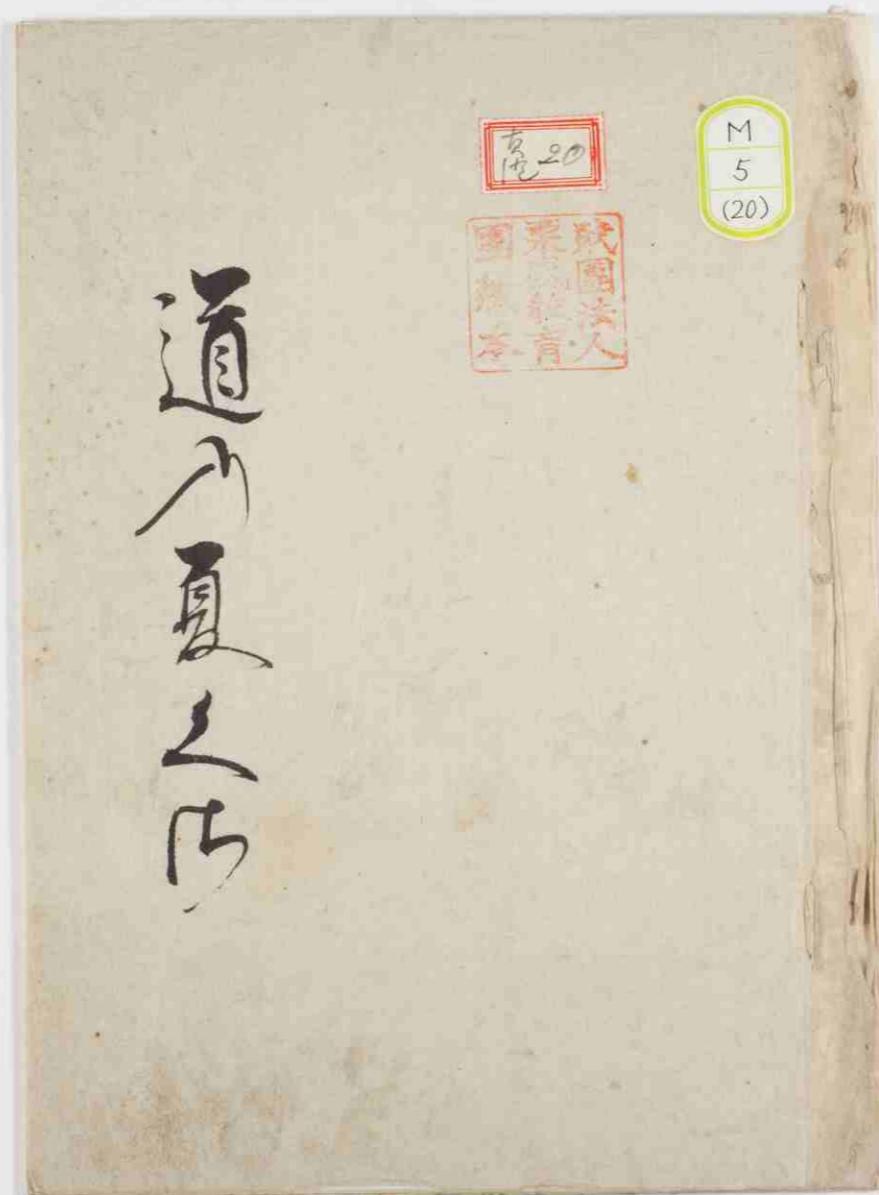
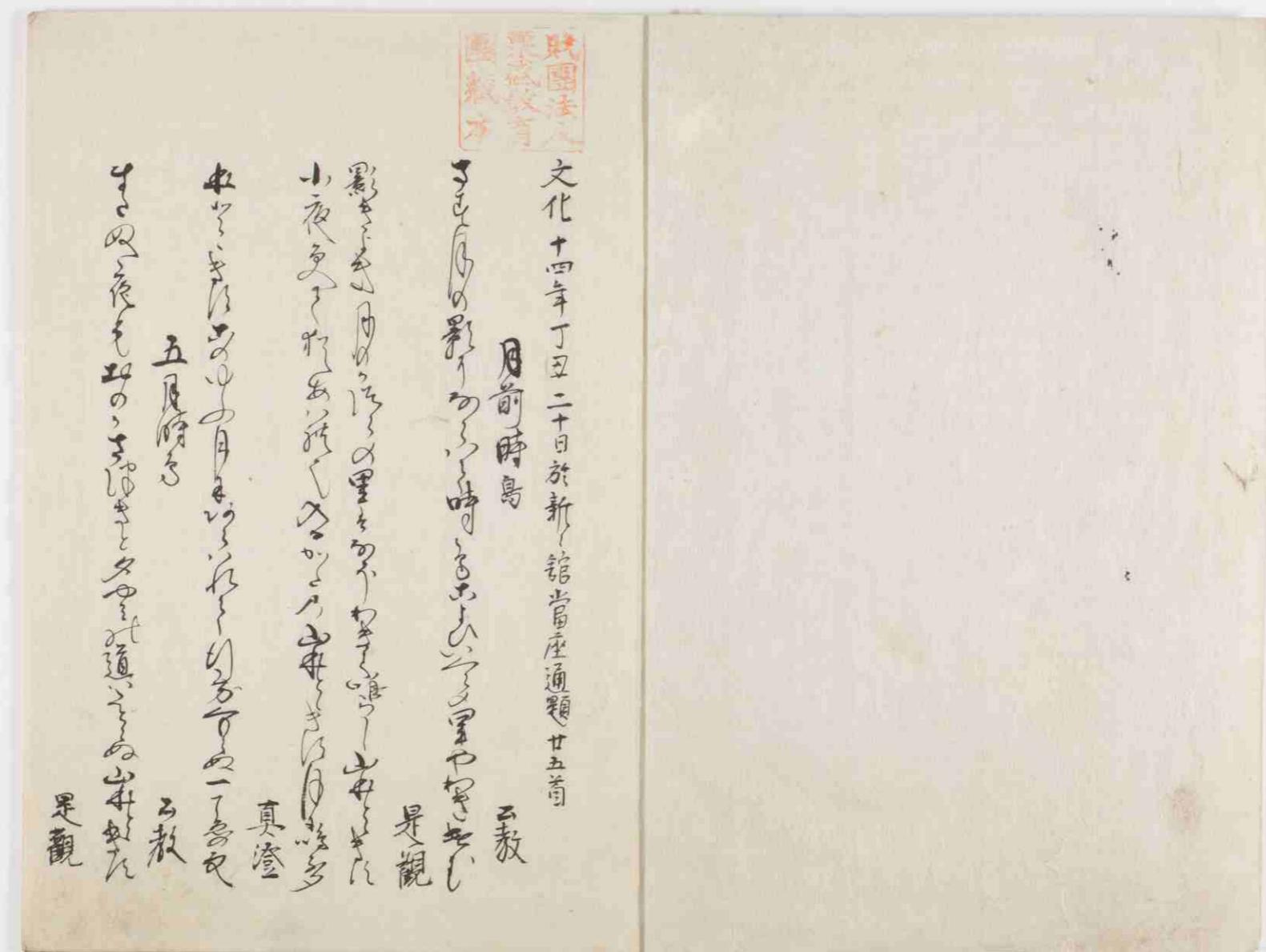


破損あり

以下 汚れあり





いわゆるのまほまとひそかに伏す事多きが故に
舟車にて己のまづれと擧て本の心を知り度す

真鑒

三

時聞山家呼鳥

上卷

乙
教

世人の心を馴れずには我山すまうるを
アラシムカニハシテシタリトナマニモ
セシム事無事也。高野の野端ノカドキニ
其の事無事也。

直
登

夢中時鳥

乙
教

是蘇

卷之三

日暮山中雨
孤舟一叶身
不知何處去
但見水東流

乙
卷

詩集事後之題名也。其一曰

一
九

おちのまへおかにしはまを時をやまうかく

とくやまくの月の夜をゆきまへる

真澄

のゆめとよひ

我と又病の夜の故にゆきとてゆきすうゆく

是觀

おのれの身もあわせてせんじはめまへれぬ
誰かうそつむけたむとゆきすうゆく

真澄

月をかみゆきの夜をほのかにゆきすうゆく

真澄

夜廬稿

二教

おとことよひと老の身すくはりのまへる

是觀

多くきて一ちよ多からぬはゆの夜深くゆきのまへる
福のもととものよの外ひとよくゆき月の少夜風

真澄

まくはりうきよのまへるはゆのまへる

二教

小夜あくまへるはゆのまへるはゆのまへる

是觀

片づきゆとてむかとゆかとあくまへるはゆのまへる

破損あり

うらうむと見ゆるを放つて事あらば

まく又もと見續くもとて差の餘間ア莫れども亦

戸外擇

竹の内をもと見ゆるを戸外雨の擇さく

是觀

はるかに其の事はもと見ゆるを西にしうちまくう

移すと見ゆるをもと見ゆるを近づけたるをも

湖五月雨

真澄

西風と風色を移す戸外擇もと見ゆるをも

云教

此方を鳴鶯の声と名めふるは五月の聲

是觀

五月の聲と呼ぶ比鳥の声と稱する事多きが如也

真澄

其帆を和氣と呼ぶ事多きれどもよく鷺の舟

旅五月雨

云教

日暮す旅をもと見ゆるを右に五月の聲

是觀

まひ衣の聲と見ゆるを鈴鹿山脈の聲と呼ぶ事多き

都物と見ゆるを文吾書路の聲と呼ぶ事多き

真賢

水鷁

水鶴
五教

乙教

摶の戸のあそ牛と勿れ夏の夜をすてても夢叩く社の女
警うらうめやもぬきぬけにまきをむかのまく葉の女

真澄
紫の戸

浦夏月
二教

漁夏月

卷八

是觀

真登

見事なもあつた。明のまじめの氣とすまの商人

乙
卷

是觀

卷之四

今朝の氣象の事と氣候の事と風の事と雨の事

三
卷

あはれのあらもひよどり織にて厚てあへて本うねり
透と小折もほろを初めやのうてまつやうの光
金と金涼しきの夏やじもるじあててくらうつげど
是觀

庭園裏

云教

やそ見じ秋をすみ紅葉色とておほきにすむらそと
是觀

竿葉あさ了御の頂根とて色あらぬきてこそ花
庭の面す前のかづらと草とまづかくこなじてす
是觀

真澄

ちく高と風ふされ夏くわくとすまうり神てしよ
是觀

い叶のうひく小はれとまつて風よわれとあうて
是觀

ぬくとも乃多夏やの草高みひく涼と風のあ來
云教

よさうせあと無う夏叶のあけとひぬ園梅のみち
是觀

ありて世の道ひやも夏草の涼の草あひてみたと
是觀

真澄

風前夏草

云教

わきのれりへもりへ身代ひをかうに國體をも

雨中螢

云教

そくすむれを月のあはれをも見てあまえも見るを
是觀

みのまつめもあはれをも見てあまえも見るを

真澄

螢大遠簾

云教

そくすむれを月のあはれをも見てあまえも見るを
是觀

真澄

云教

そくすむれを月のあはれをも見てあまえも見るを
是觀

真澄

云教

そくすむれを月のあはれをも見てあまえも見るを
是觀

真澄

云教

そくすむれを月のあはれをも見てあまえも見るを
是觀

山川はほどのあらゆるところを度とすからあらまよ

うるる島川の風度もうちをとすものと

江菅

真澄

筆と紙と江にさしかかるの度とてはかの筆と

風度に入りての筆度とてはかの筆と

村風聞箇

真澄

風度入はりての筆度とてはかの筆と

是觀

吹送の風度とてはかの筆とてはかの筆とてはかの筆

真澄

墨のふきの筆の度とてはかの筆とてはかの筆とてはかの筆

漁舟達は

云教

タリうき追ひ縁へたまへるほどのうきのうきのうき

是觀

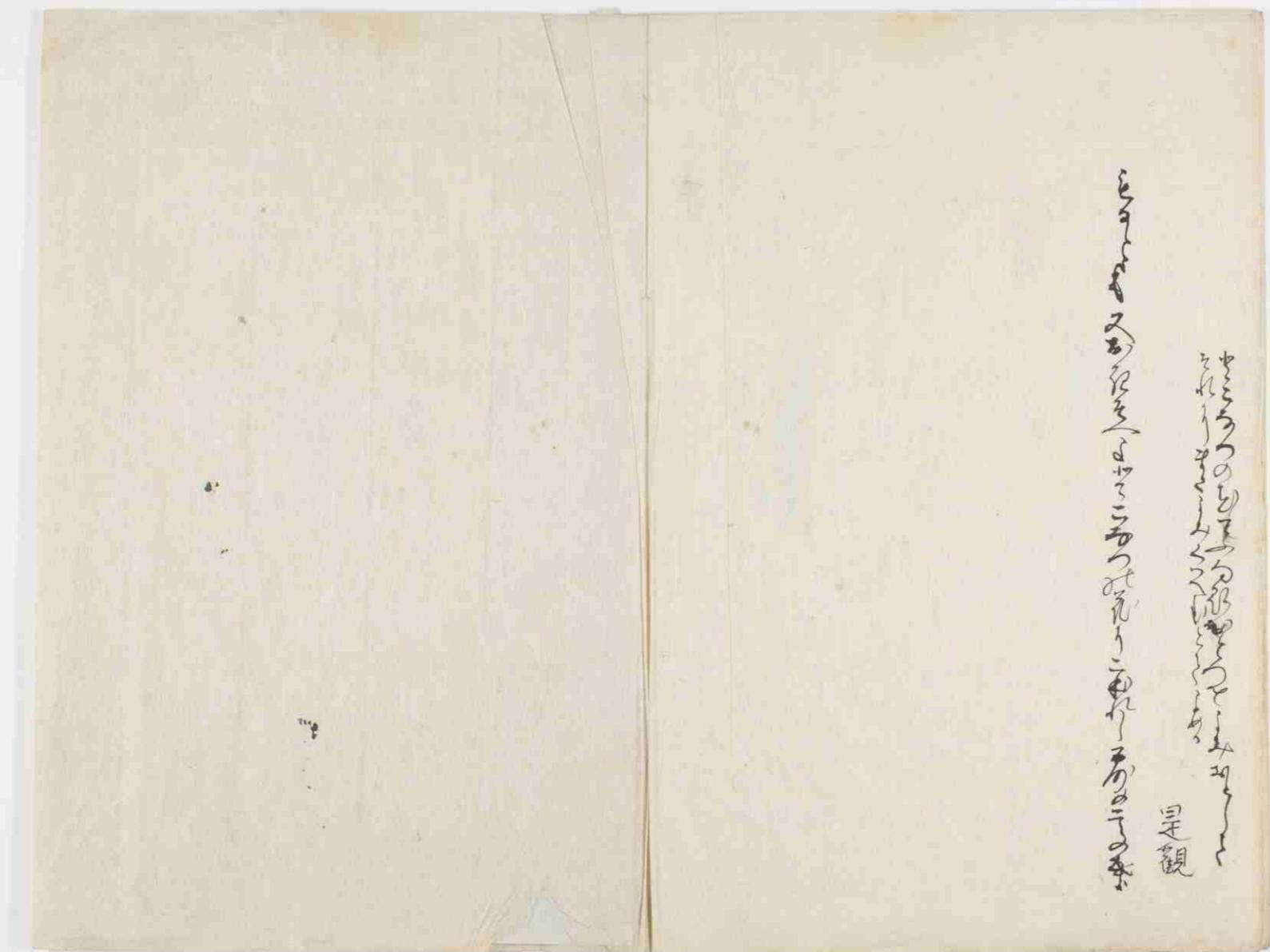
五つとおのづかく接せし間の度とてはかの筆とてはかの筆

真澄

墨つねあさま小舟と波風の活けるせりすがるを

云教

破損あり



破損あり

